武教小學

全

萩圖書館圖書
部門 七乙一
番號 六
冊數 二八

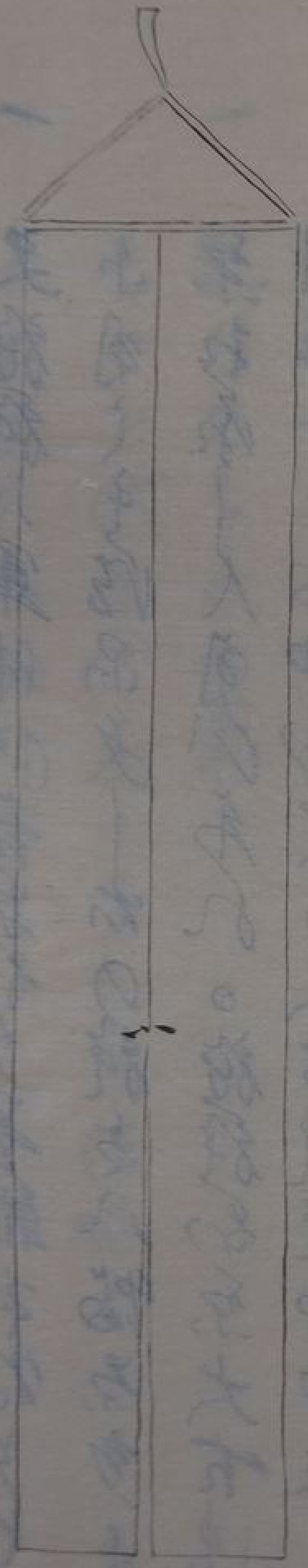
武教全書

兵具

旗ノ可仕立作法

一 旗の竿

長壱丈弐尺或ハ壱丈八尺たるへし



一 史旌旗ハ軍中此書写の幕額なとそ
小用こそ法界多し右の旗を八幡大菩よ
奉始承し人用ハ奉り 白旗旗を奉大古法
剣法ハ 神祇安の大常此旗御所位の
時前案此旗を剣相記とし為翁ハ之翁尾
為旗九八卷の号常称ま ゝかまと此剣尓
ひとし
虎鈐經曰旗幟者軍中之標表也以門旗為
首竿上置金銅珠大纛深紅八幡樹大将牙

一 帳前 云云 東鑑曰千葉介常胤献新調御旗
其長任入道将軍頼義御旗寸法一丈二尺
二幡也又有白糸縫物上方伊勢大神宮八
幡大菩薩下縫鳩二羽相對是為奥州追討
也以義澄為御使被遣鶴岡別當坊七ヶ日
可令加持之由云云
一 乳付のもとの事
是ハ色代用ハ奉る寸か染法前より用し也
一 丈許尺二幅な染

一 上古の旗ハ白き色の纐纈として何事よ
からみ長手無紋を以て乳付の旗に結
し或ハ竿付を縫ふくみて横山旗と云ふ
者もありけり　古法皆此を以て本とす
旗の布ハ文好寅ニ相ひ定へし

一 乳數ハ九ツ或ハ九ツ五ツ定し無いかやう付
かくいへとも定ハ付りく半部し

一 旗の紋ハ家ニ大将の好ミニ任家紋なり

一 幡數ハ纐纈可定し　但シ文字の多少ニ依

一 是つかね策

旗竿の事

古旗竿の拵やう何も宜し

今流の旗竿の法を代々相の無之によつて

長殿も面々好みて幟三幅或は大ちさき吹貫

吹貫かゝし四方出來或は滴といふ事なれども

ちやうちんつり燈金紙の御幣割札無言

なり白熊黒熊ちりさきもまん半月杯の

如く前飾には揚羽有し旗滴と云ふ事也

是等は各其備の区々たる代わる聲の

如くなる也而も旗を以て約束いへるを

用ひ候其は中々相手の法は無之よ有

まじく候

一 幕之仕立様法

多く幟幕之事

幕の幅は十二月をかたどり十二幅なり

是代二ツには陰陽の幕とも云幅の内一

幅をことく三段とりて三縁縄にて三縄

とも無し候夫白吉忠様三色紋用之御家
の陽を加へ候得ハまくの法ニ写本ニ而

一 幕の長さ之様体付三帖のまく様体
まくの事ハ大中小有り大幕中幕小
幕なり七幅四幅五幅のまくと云ハ三帖
の幕と云ふ幾くらなり大幕ハ四丈弐尺中
まくハ三丈六尺小まくハ三丈なり大幅
の幅ハ幾幅の法立なり

一 手縄の長さ五幅様まくハ四丈五尺六幅様

一 幕ハ四丈八尺七幅のまくハ六丈三尺之
也前ニ書有之以上白様幕ハ手縄之所ニ有
之候事

一 乳の数九ツ八幅様ハ此ゆへ也九ツ八分ヶ角
花の乳より通ニかぎる也九ツ目様乳様
之様也四付半幅を隙くなれなり縫の幕之

一 乳数三十六也多し

一 乳の長さ五寸弐分之然の長さ七尺四分広さ
壱寸弐分なり

一 軍幣の数九日月金白緑文廣袤被人日月
の軍幣共天の幅と地の幅は前に付表き
天より付縁を緑に二寸ほどに四寸余九
つかり勝の幅出竹の方には付けよる
前条掲之の廣さ八寸七分かり
一 幕仕立て条陰陽の条より天の幅と二の
幅地の一通りを地条は縫より打ち縫かり又
但条もし仕立て之条に出条縫紐に縫留条
也自て地金よりて上金ー

一 幕縫より付様しまくりて表の色しは地
前へ出しより出しより縫へし打ちとくへりより
布地を出右出りより出縫のまね出り紐
よりて二通り陰陽の条より縫へし縫紐
也 縫箇条より縫当よ出へし
一 乳の付様付面紐に七寸よ付金し或八寸
八寸もて付へしたし七寸より五つ取地表吉也
前り付も立て白よも書る書へ出て花前り
一 縫め皮の串付目より地仕方地絹起よ切

一　揚巻の縁先ニ結目之結様ハ結首
紋ハ出し帳幕子ハ男女差別有之帳子ハ
幕ハ天の幅ニ付ケ紋を出すを二男ハ天
の向ハ横ニ付ミ之ニ出す廣サハ天の幅
其手ハ陰ニ中二幅ニ書へし紋の杉幕ハ
大小ニ拘らず三尺五尺七尺ニ仕付
一　布羅帳幕幅ハ十三分ヨリ五十分迄
の女ニ大を右をニ其ハうすし布を羅へ
無し糸羅之事

一　幕串の事ハん有ヲ限下ハとり付際本
の高三寸幕のさり之地限上下の高さ二寸
限際本と擢之の高ハ布の幅ニ毎ニ易へし地
ニ入る一尺計寸之幕串の杉行幕ニ以ス
究成ゑし
一　幕串長ハ八尺方角ハ一寸の横ハ角ニ割
三ん有ヲ限ニ際し夫ヨリ四寸下ニ杉行首
其を門迄ヲ定しニ出ヲ地入ハ横ニ法
ハ三尺計之串ニも法ハし先ニ未ハ将軍家

あり

一 幕打場何方ニ而も下座敷之の方ゟ
勿論あり先座敷の左柱二本め之幕串
ニ面御打し也秋冬ハ右柱三本め此まく
串を角を打しも出入の所ハ左右
の幕ハ合目左ニ而合せ六尺ほと明ケ打候

手縄打紐ハ渇を打あハ法ニ而あけ候

一 幕打方打とハもし風うち猶も打候

一 幕御法事ハ候方申来ゟ御越二人ニ而張候

あり又法事の時ハ申来ゟ二人ニ而書候
打ちも打目打候

一 幕出入の串出入之所ニ幕御書入申ゟ出し
入候へ打こし候 出入是ハ人へし又六尺人ほと
ニ而下候まの手縄ニ而結ひて入女性ハ内ニ
御ハ手縄打付肩ニ而結ひあけ候ニ

一 幕箱の寸法竪弐尺八寸横三尺六寸高さ
まく此ちは長さ壱丈ほと

一 幕の定紋花ヒ紋之事

一の幡ハ天の開也以上経ハ二の地と云
戒也あり内地開と云ま経ハ三の開口の地
を勝の開と云　七曜日を並かとも右かの
幡九云之幕の中を天の彼九ハ風神の右
を水の彼といふ欽の幕をハ门と云味方
の幕をもあといふ后りえをもしりえ
兄将在山の時も幕神法と云行幕をハ行
りこと云二ツをもつ法とて一ツふとそ
云前也

一
幕仕立吉日
母倉日　春亥子　冬申酉　夏寅卯　土用巳午　秋丑未辰戌
天赦日　春戊寅　冬甲子　夏甲午　秋戊申
悪日
羅刹日　因果日　三殺日
吉方
開神玉女方
時元
遁甲成就
幸東乃信

内幕之仕立作法

一 内幕の絹布縫ハらんのせんしを用総而

色代ハ金らん純子又ハ布そめん等ニ而用

いれ晴成所也

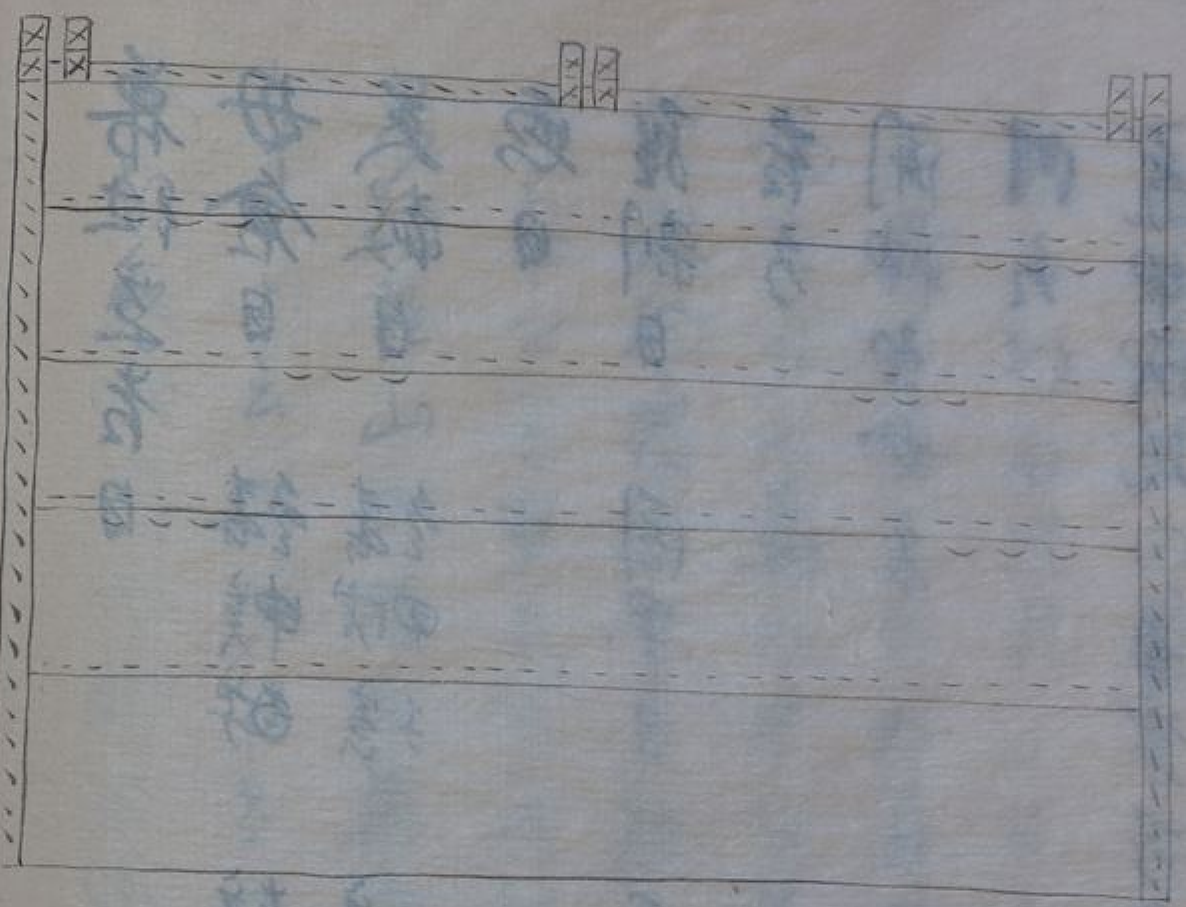
一 幅の数上の條幅ハ家の紋を付其下の立

幅十二幅又ハ十三幅ニ横の長さハ絹張

幅ニ縫 ―

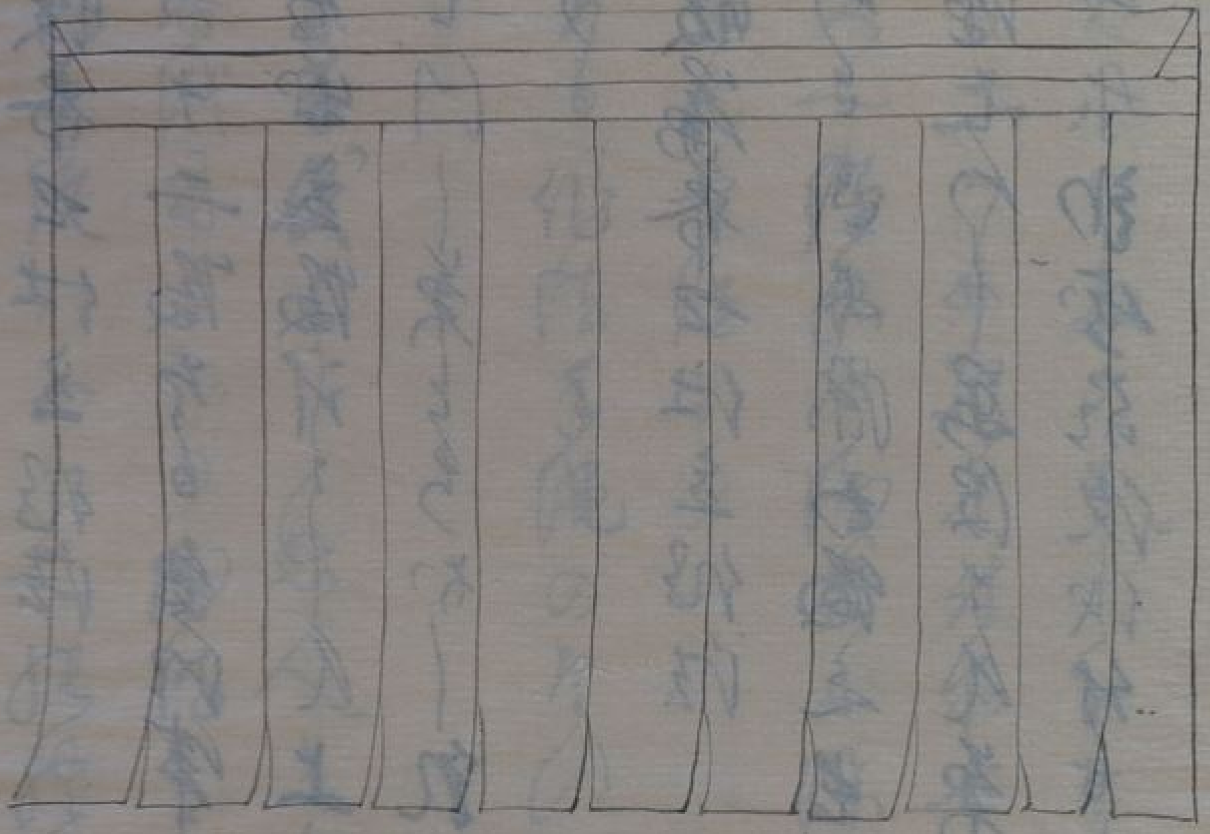
一 乳ハ幅の絹同色を用数ハ十六十八九ツ

ばかり



一 簾の幅壱尺二寸ほとゟ付ヶ不縫
もつし六寸ばかり

一 縫糸長糸ばかり縫中ら針色しも糸ハ白
いろ革とちの皮ハあい皮ばかり 一寸計ゟ
ふ切付ヶ為す



幔幕之仕立縫法

一 幔幕ハ十二幅なる事定法
一 紋染ハ出立幅計ぬし上の横置なしト
思いも川し筆とちかし乳付又ハ縫らく
みなり

腰幕之仕立縫法

一 縮ハあさき幅深み幅之長さ丈八寸ホ代
六寸縫ちかし足袋ちか筆とちかるへし 波
の長一寸乳出来紋染付るなり

一 乳付ハ八ツ幅のもしちなし へ乳付るなり
長さ寸二ツ幅折て付糸七分手縄ハ長一
丈乳之縫糸ハ縫先に深み縫み幅の糸ゆるく
長く手縄て縫なり
一 乳縫付目縫法手縄のひ中ち幕まで
とし
一 今案ニ黒紋より思人之幔幕地ハもちり
あけ幕紋用なり 陣張幕ハ十幅ニ七尺五寸
一 小幅ハ紋ハ六ツ之 陣幕ハ四幅乳去

十八之中をわれらもしれわけ度時ハ中纔
高川あり之風ありとの時ハ中を三ヶ星
並之色を白代内也之ことを附縫而也ぬ
候也なり

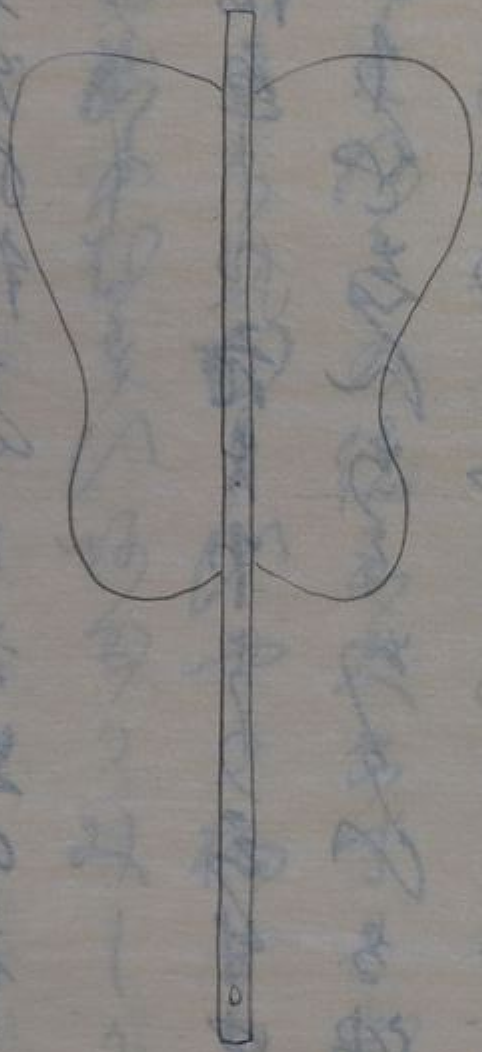
幕爾之次第

一 御まく四幕ともまく風幕ともまく花幕陣幕
雲幕籠まく帳幕幕ハ帳幕計帳幕次第
今案ずるに陣大幕を大まくと号して出陣
三丈新矢紀枚三十二幅有まく有又横幕

とれ長二丈五尺五幅の幕有是御幕之
史幕ハ軍中の大事之儀を帷幄の内にて
らし猶手に作り里此御まく川ある是まく
の處法之義ハ大樹御幕下と号せり然ルに
後代古法を損し之の諸級多家々の流級枚
多有御幕様子此様く作法是まりて流多
しと云々後代ましく前漢来之流不純之

團扇ノ法並服法

一 軍配團扇寸法竪八寸横く上九寸中七寸



三分下七寸ゟ弐分あり柄頭三分出し長さ
一尺一寸弐分たゝし是ハ公方家御團
扇の法あり平人ハ柄の長さ八寸弐
分あり下より弐分半より上ハうん好き
の元を四ツ厚さ四分半あり

一 柄ハ竹の上にて紙張柄ハ骨字本あり文挟
とれある紙目本も竹之紙の好きよ勝手

采幣ノ紙継様之事

一 はゝしの長壱尺八寸幅ハ壱寸五分之

一 采材ハ紙縫ニ至テ元足の方より七寸中分

すへし

一 縫通し紙元先下より三寸中程通し

一 上下をまんちうかうにして縫とんとり上

下の紙を両方に二重巻とゝめ出紙ハ本末

打紙等本末ニして用ゆ

一 紐子長壱寸幅ハ五分打紙家本数多継之

一 紙数七枚十一枚十三枚ニ切

一 采材の縫目ゟ壱寸三分宛あまし置

を紙の余り

一 うへ幅さの縫三尺壱寸五分之紙ハ采色

布団ニ乃り切ると中より橋より三寸三分迄

紙ハ切とにて横のつよしうち方壱寸三分

寸分り

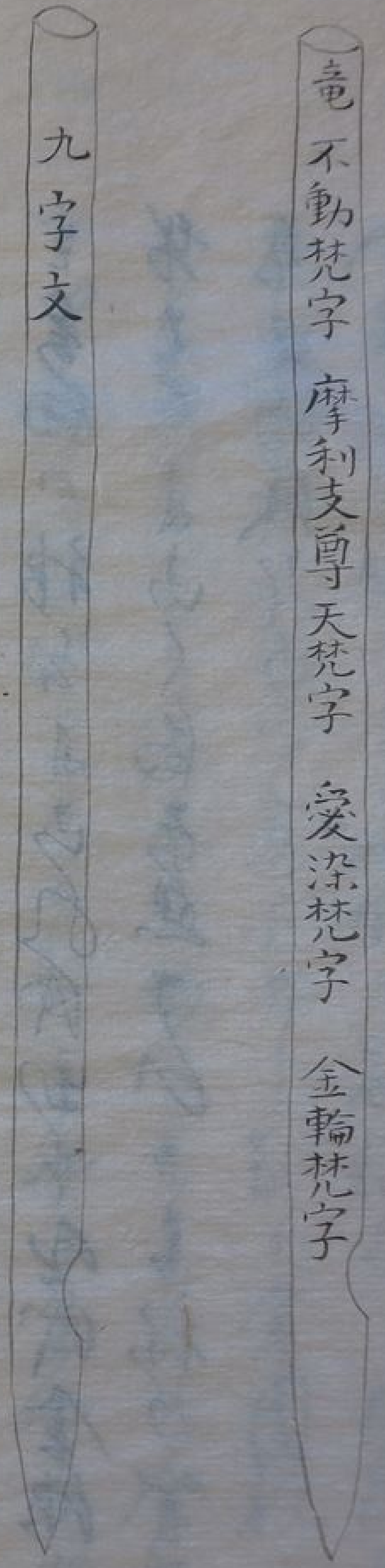
一 采幣の色ハ赤白小色 但朱采幣ハ御大将

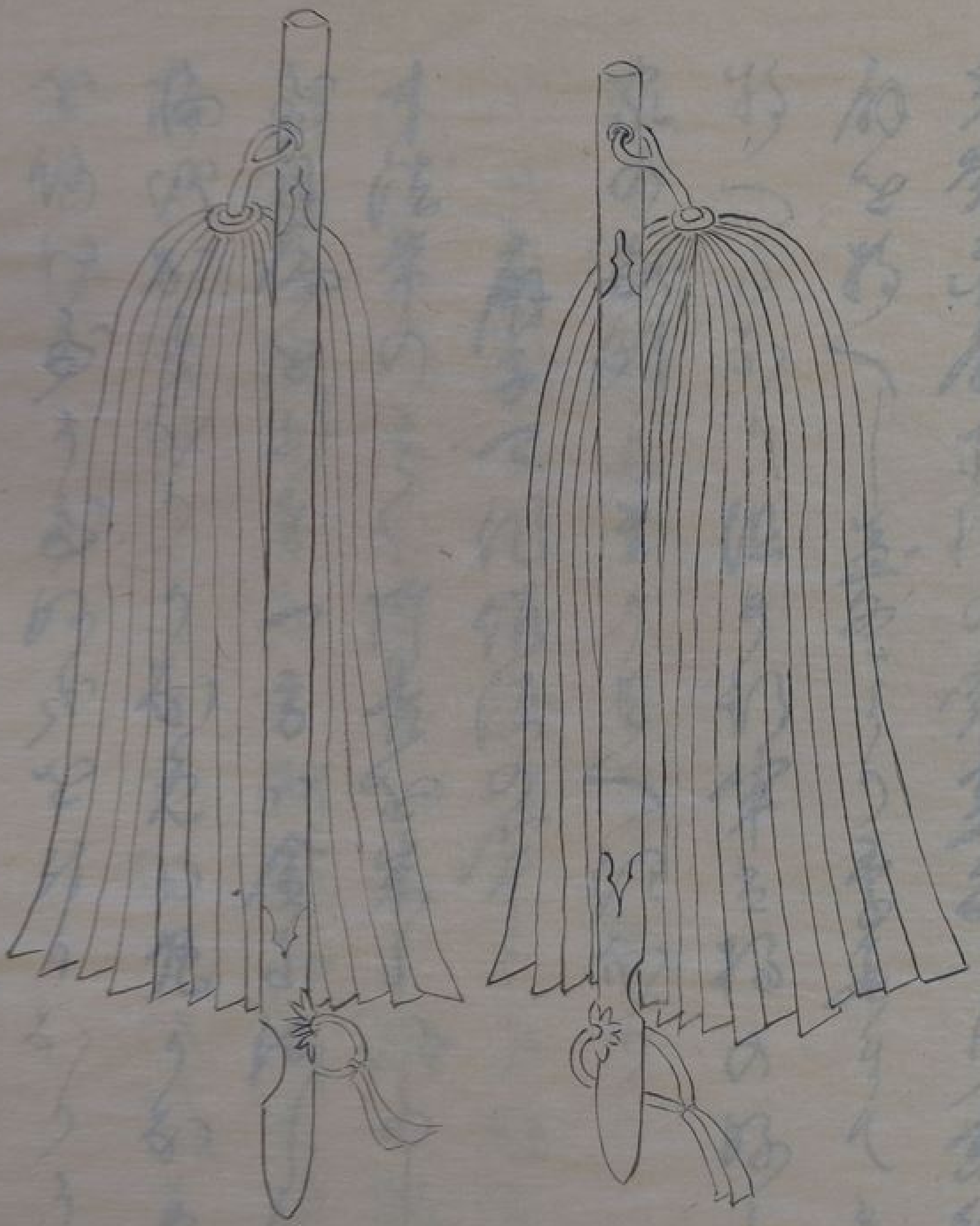
所持なり

一　白来幣ハ清らに紙まくあり　朱来幣ハ木
地なり
今朱ニ朱幣ハ修紫悪霊の創臨なし　内外氏
能を以て人形を造り出して紫国氏ニ
寄て能ニて之の不浄なく清めしの合召
をうけし也　此ヨリ是を之由ゆ由ゆ終
是時之悪霊の魔を是をさいもいの仏ニ用
なり甚ニ至代かし人魔の事をさいとよ
より日神に用る其山河のさいもいを神

道ニ用る所の幣は素しなり紙を
朱幣と出盛し朱はいろとなり幣ニ云
是なり　此ハ人にかし先といはいんなり
是悪霊ハ神出ニ出で外出を至代金銀く
幣もくまなく悪霊進ましいふも称うか
是文明残なり

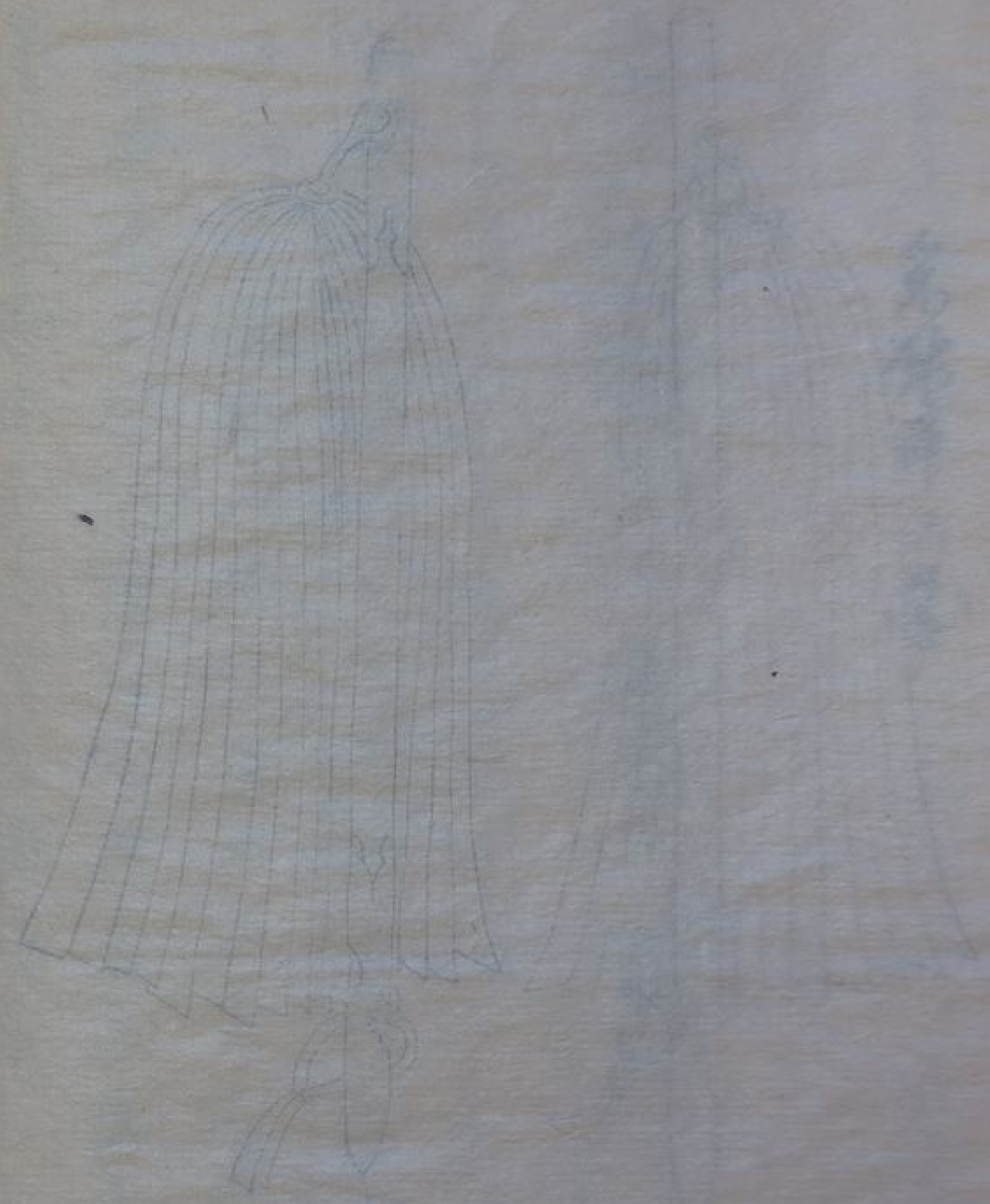
采幣串の図

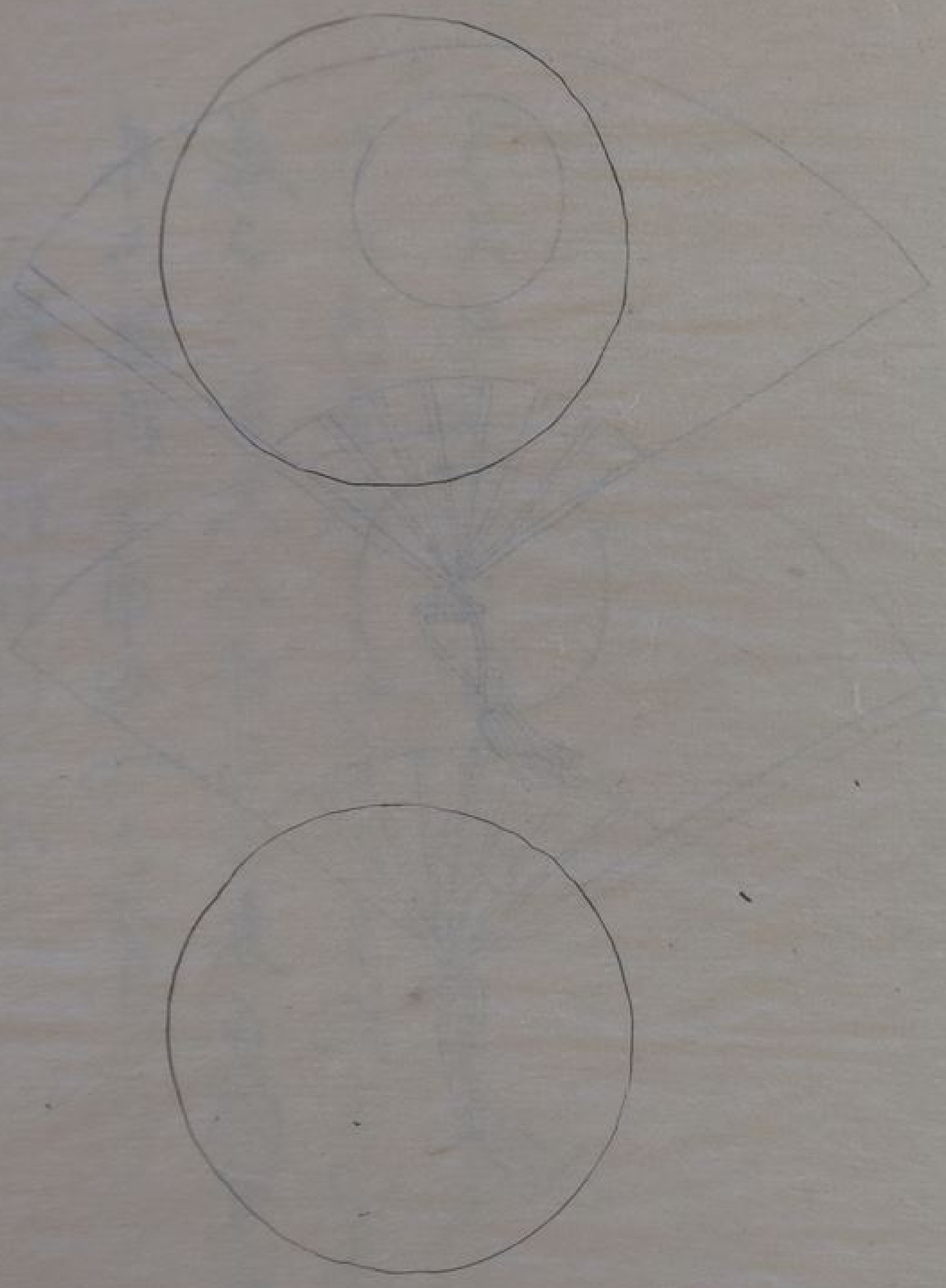




一 束帯并衣冠所持の節夏より来秋迄大事
衣冠を持へし其ほかより束帯を
持つきなり 但し新調持の節ニハより
衣の節倒みまりもへ其御なり
扇子ハ紙張法の節

一 寸法常のとく折目も来ルハいたし金ミ
衣服を出きハ金ミ付ル人来の日
ニ付ても其ことくハ拵方ニ此上に先
を付ハ衣ふ名ヲ其ニ付ても考ても出来





六寸なり

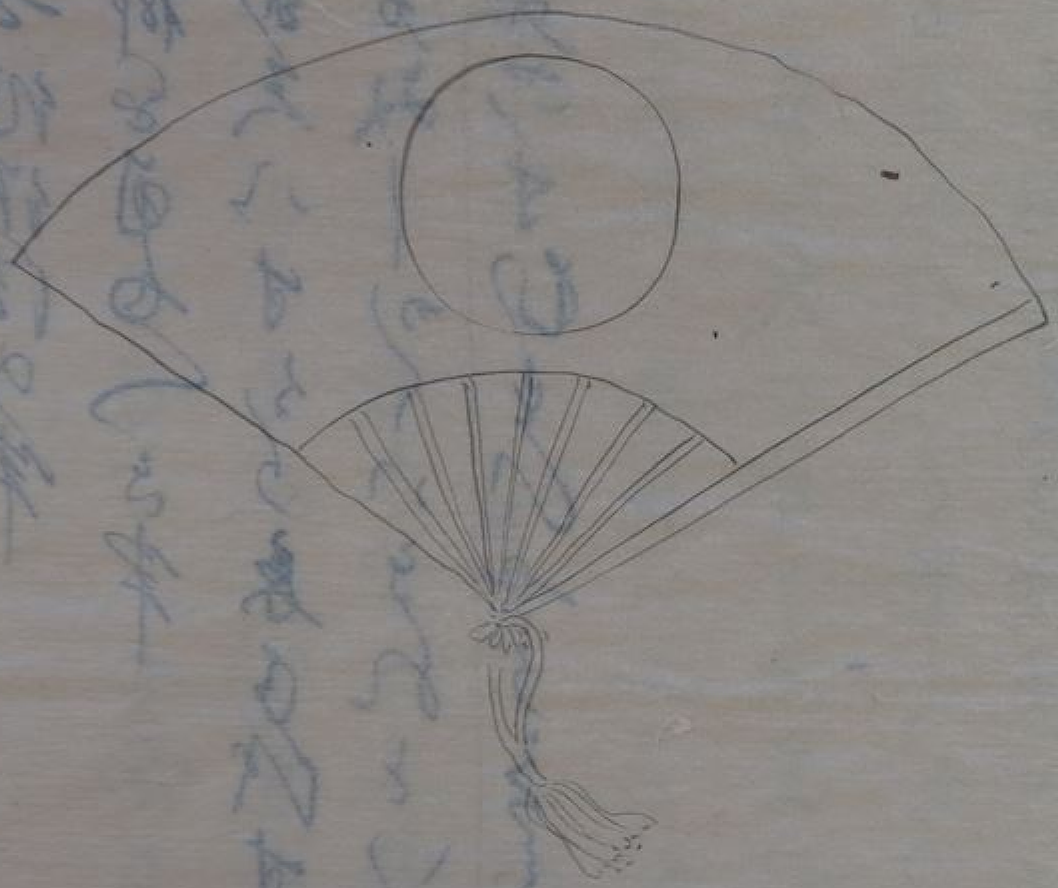
一 骨ハ八本なり上下ほと訓ニ而称ス時ハ之

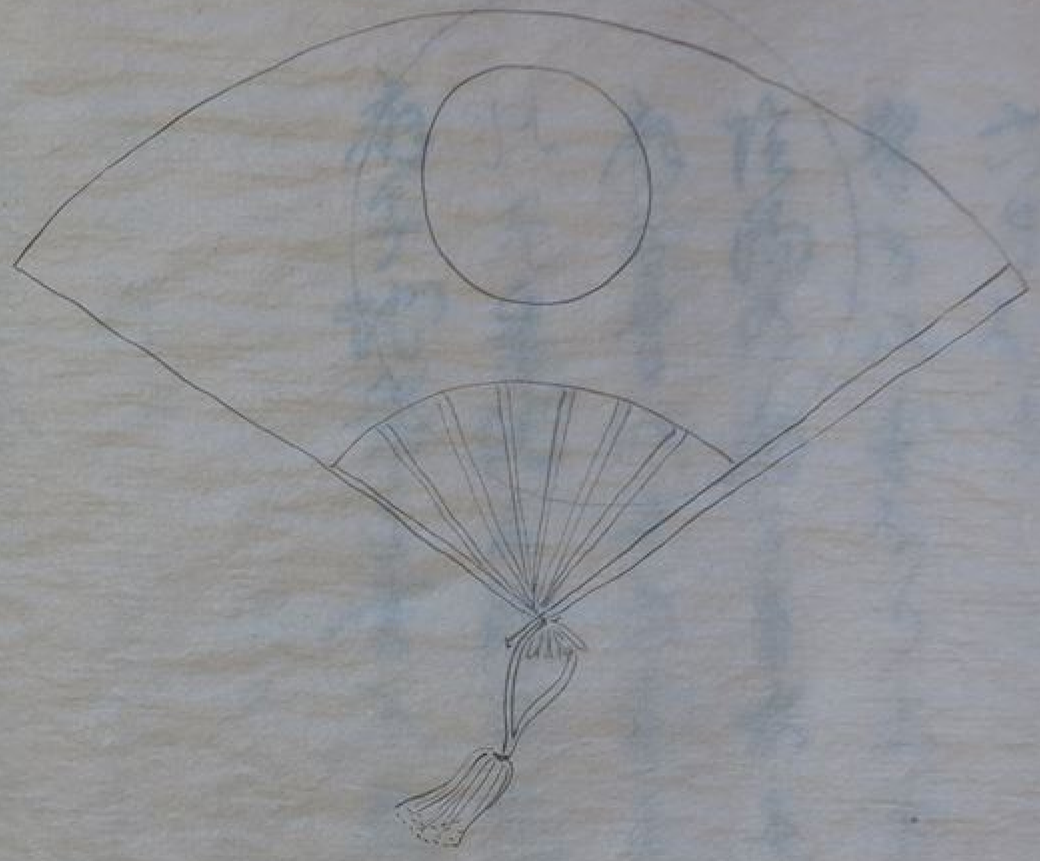
一 陰陽の扇子有右ハ陽也左ハなり陰也

扇ハ骨代十六本ニいたし地ハ泥箔ニ朱

丸九重地ニ泥の丸なりうへ蝶ニ有

扇子地常ニ書入文字の事





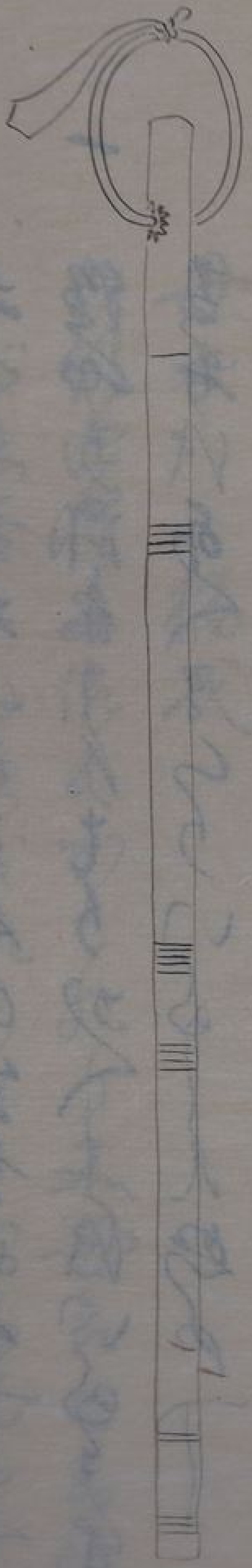
鞭ノ緒(?)結(?)法の事

一 木ハ雌柳を用ゆへき事

一 長さハ弐尺八寸より家(?)五(?)寸并(?)定也 古(?)

一 くハ清(?)め(?)なしかくハされ(?)といふ(?)之

一 うん思(?)ふ(?)ところ(?)すむる(?)ひ(?)十(?)ゆ(?)る(?)



縨ノ結之緒法

一 母衣寸尺の事五幅五尺七幅七尺十幅壱
丈とゝ大小ハ主人の器量ニよるへき之

一 縫様ハ所存ニよりかへし代いはす
其外代へきいはれ如何下し

一 母衣の色上古ハ赤白の二色なり当代ハ
五色或ハ青色或ハ紫まて定れる日次第也

一 結法総ニいろいろ有之なり

一 ノ結之目 春庚辛 夏壬癸 秋甲乙 冬丙丁之

一 母衣の文字之事

武羅 源氏

神衣 平氏

縨衣 藤氏

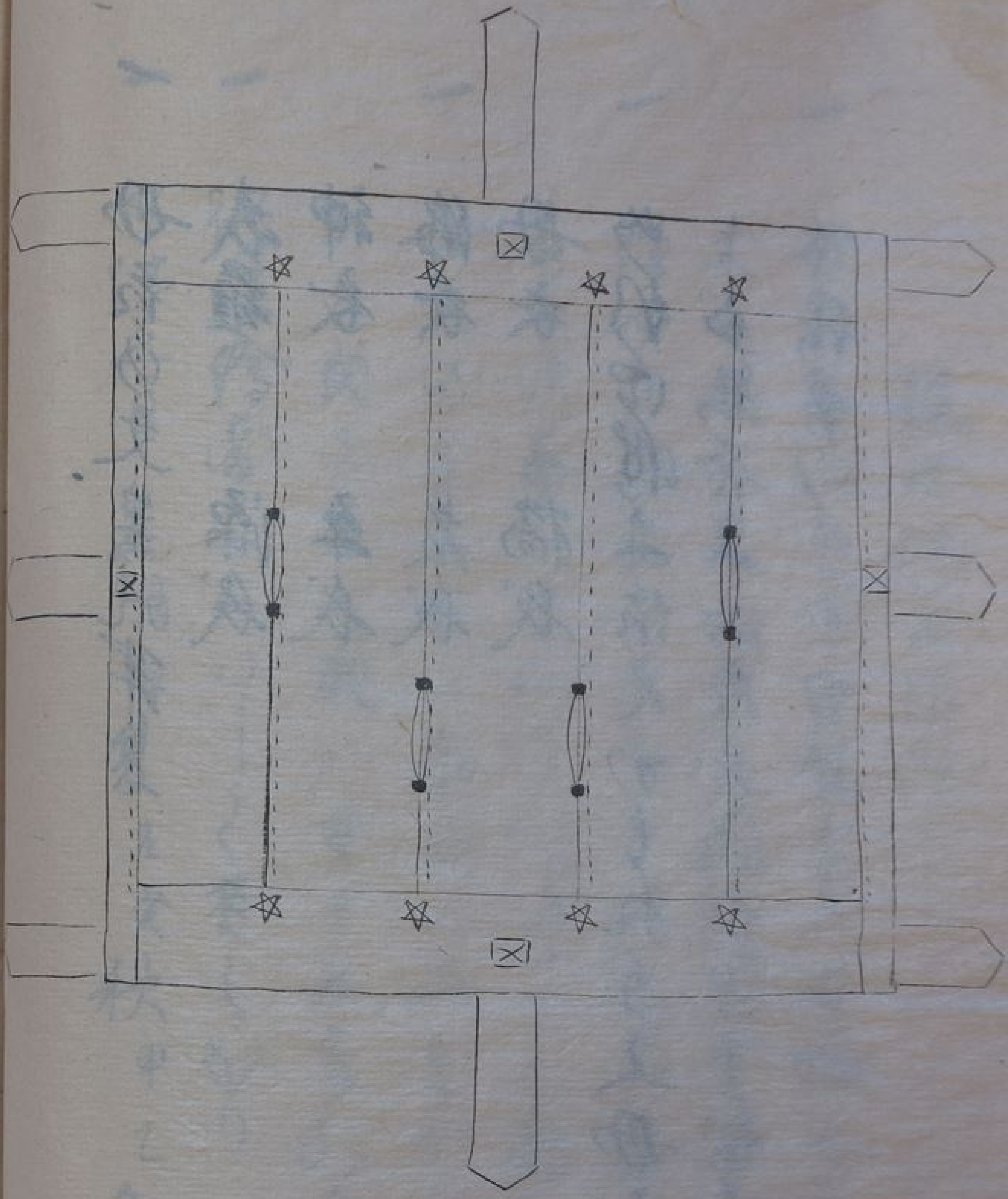
母衣 橘氏

此外四種母衣ハ所もおゝり又母衣の三流
と云ハ熊谷平山藤氏流ト云ゝ三家ニ委統すし
ノ結目ハいろいろかゝし

今案母衣ニ定ノ法一ツナシ上古ハ
之大将御前ノ兵有武士ハ中母衣ヲ指シ
免スモ云テカクシ伊豫守頼義八幡太郎義家
夷ノ貞任宗任ヲ追治ノ時相従兵士九十
七人母羅ヲカケタルヨシ記録ニ見ヘタ
然レトモ形ナキ故多クノ説有ト見ヘタリ近
代ハ此紋絶テ用ヒスナキ事ノ様ニ記
法寺ヲ略之也

一

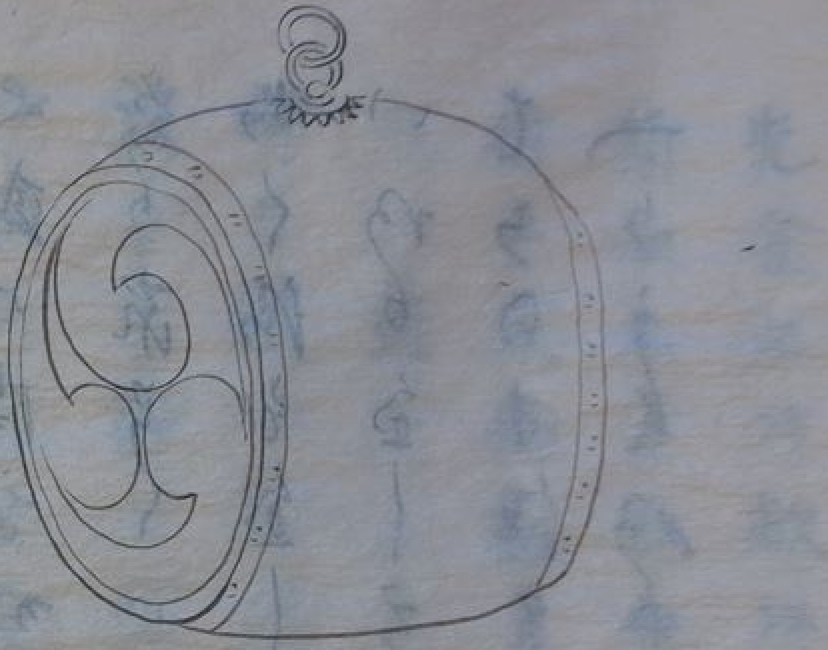
又昔幌衣ト云ヘリ袖有衣ト云ヘハ相機ハ

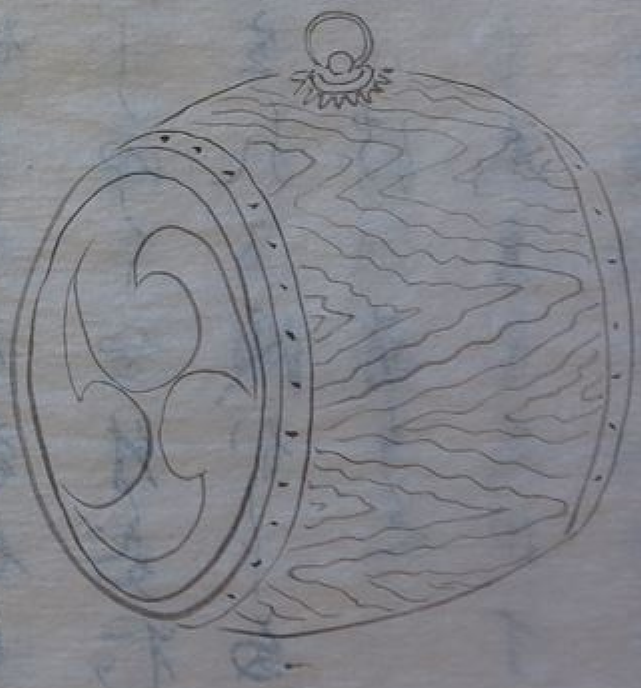


よく記しおかれはらい付會の説
世人のかゝりに迷ひぬりとぞ
以上出典
凡出見の本書に統ふくとも多し雖然上古に
見はかゝるところなし代々用ひて増多し故に
略し此り此書は出處不出異上古の剏
法に於若遠の事多かり且し古剏め置く法
まんとあらはは有すれ時に於意せしむ
かた掛りを云云於實也云去古の用法を実
にありへき代以前に發せる古法に紐
と云也此代に用ひかゝるをさるにも
笠せる故實の本意なるへからす次緒文故
実に笠標を定めぬれは事甲中古の緩に
して古くよりその法ありし緒とて似付たり證
東鑑曰行平依御調献御甲今日持参開櫃
蓋置御前御覧之處冑後付笠符仰云此簡
付袖為尋常儀歟如何者行平申云是曩祖
秀郷朝臣佳例也其上兵本意者先登也進

先登之時歃次名謁知其仁吾家自後見其
簡知之云云如此物用家様者故實也云云
行平蒙御感
雑意

一 押太鞁之作法之事
旗本の押太鞁ハ胴を黒くぬりつぶし
中らハしく無紋をくれともを書く
又大将の太鞁ハ青く塗り陣太鞁ハ木地
の胴ハ紅後のひ中らかり真少く右色
を書わハ大小大将の好ミ次第なく
ひ中らの紋色々太鞁の大小ハ次第なり
之武ハ法をかゝらかりに同也とい
ふり京らくハまんしゆくを付給ふ
ぬく法を盛し作法定れる儀なし無行
ハ好日盛しまうゆハ法代申之
もちの寸法定法なし大方三尺五寸と云
へりうん好ミ好ミ



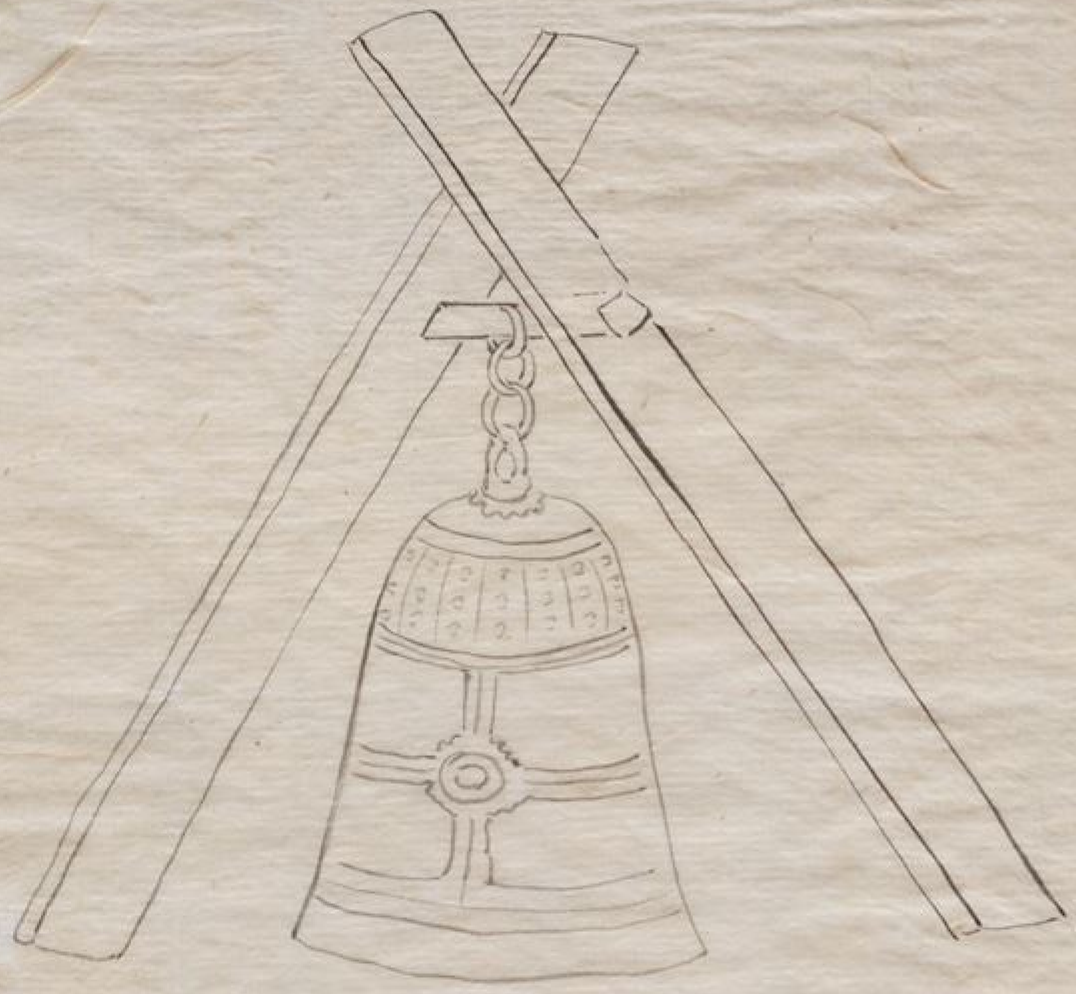


一 貝之口仕立絡法之事
貝大なるを用口を絡ミたる又云口ニ当し
針を用ふる紅の紐ニ而絡りけ絡を付合之
或男貝を用之

一 鐘乃字

浮屠氏ハあし中ら別ニ事ハいなしつ○

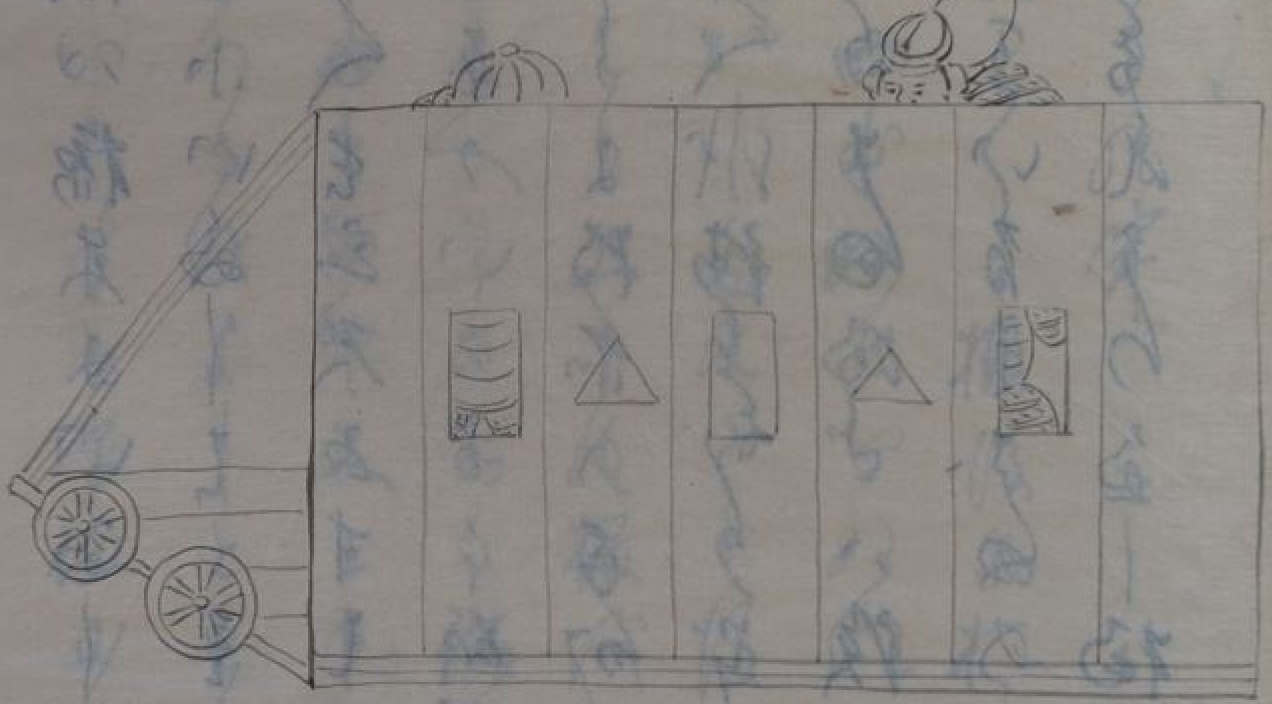
氏ら○ばちいまくいあしてねかなり



一　輿の拵やうの事

板輿の事手代をも塗美の内十あまり
あまた押並べ作しやうを改め所々に付
無し其法楼をも出付ること尺ばかりの四方輿
ばかりへ八窓を切りよし　丁輿と云是一
丁見付立て張輿へかい輿と云も同前之
但見付張輿は腰より有る腰輿と云ハ輿
御よくつるぬくいるを事なる

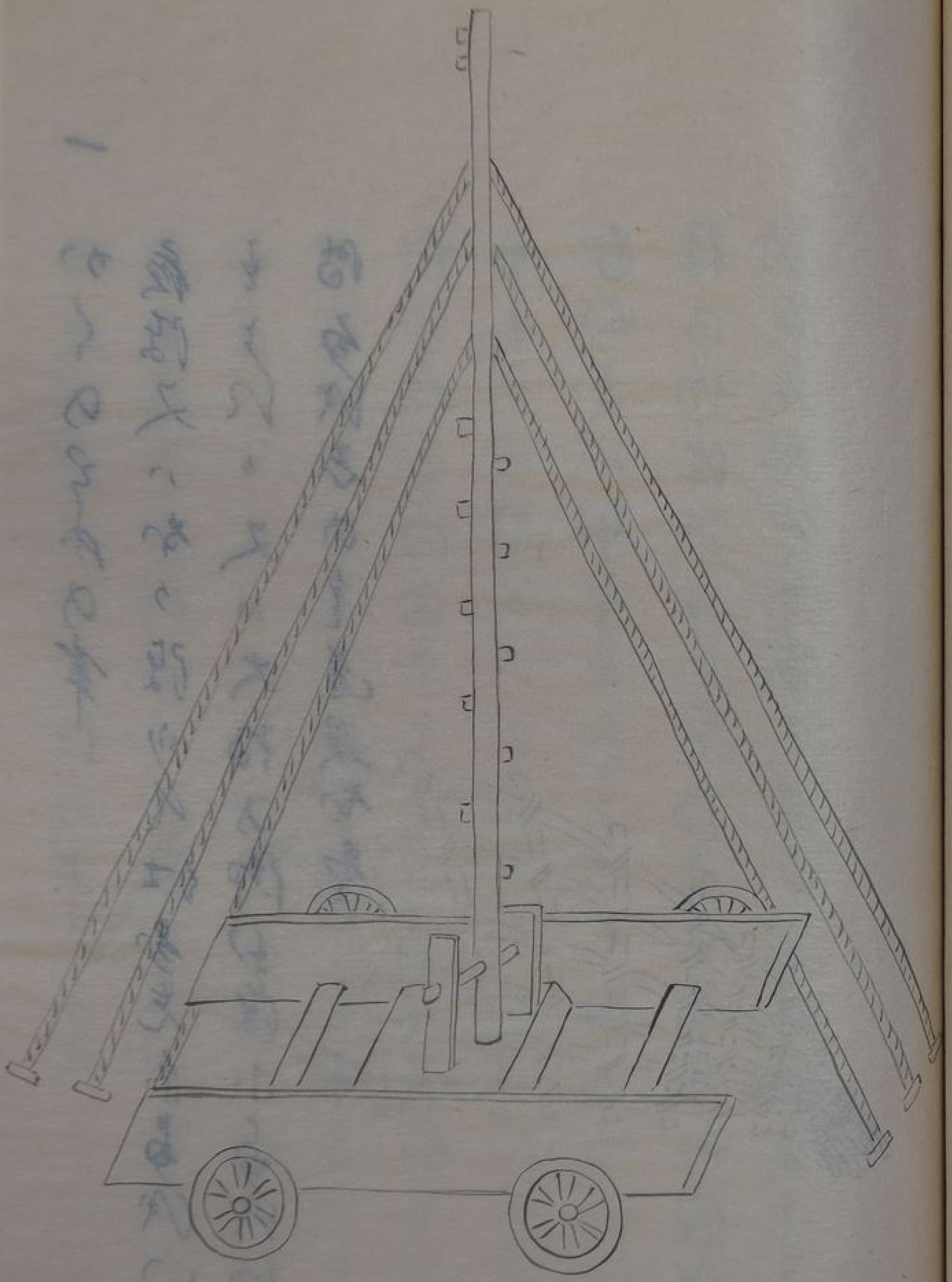
板輿の図　　車輿ともいふなり



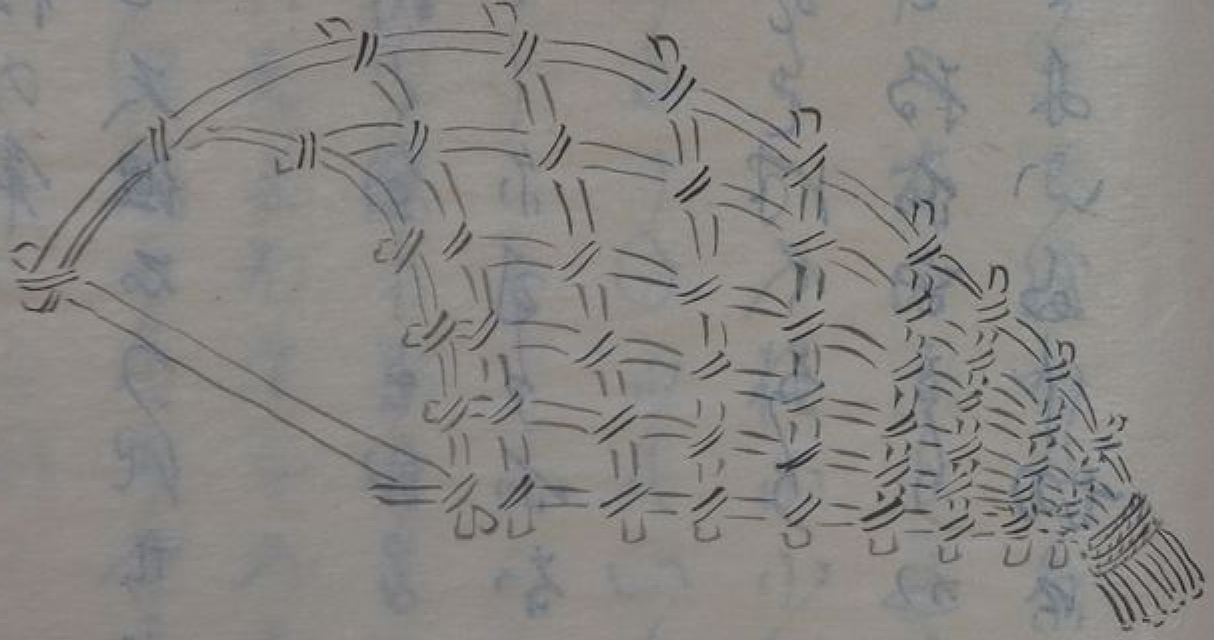
楯の板ハ檜木にいたしはつ三四寸或
ハ弐寸にいたしちいさき矢又ハ弐尺計に
むしろく長三尺五寸もかけ木結し出之
表にかきついめくぎ打とめるなに
うちうへよ楯にのるかくり陣まんを为
ひもはくを結をおりおしひものうへに
矢窓ありまゐハ鉄これ揃へくよし
てうはりい有そき内の方さを鉄砲あん
つれありこり盛し楯とよし

一 せゐろう作事

下にハ丸く/\柵柱にたてしるつるかりを
うれ柱四本ぬきを入れ板を立れ柵さに
用田柵かしるんくを板敷きくのうさに
地をとらり上まん板を打ちより上りかり方
敷ならべくるぬく結ひまを板敷板座
柵をいるを前和又三下これ楯の板をなり
たしるつるをよしと長さ前和
はりせいろうさ家板下にハ走人入かとめ



箱をさしさ図を掛け上のやうにつなぎを
付おもしらのめぐらする木の先を帆柱の
せミにのごくいゑし箱のつなぎを通し
揉の綱をて又夫つる山より物見を見る
可然



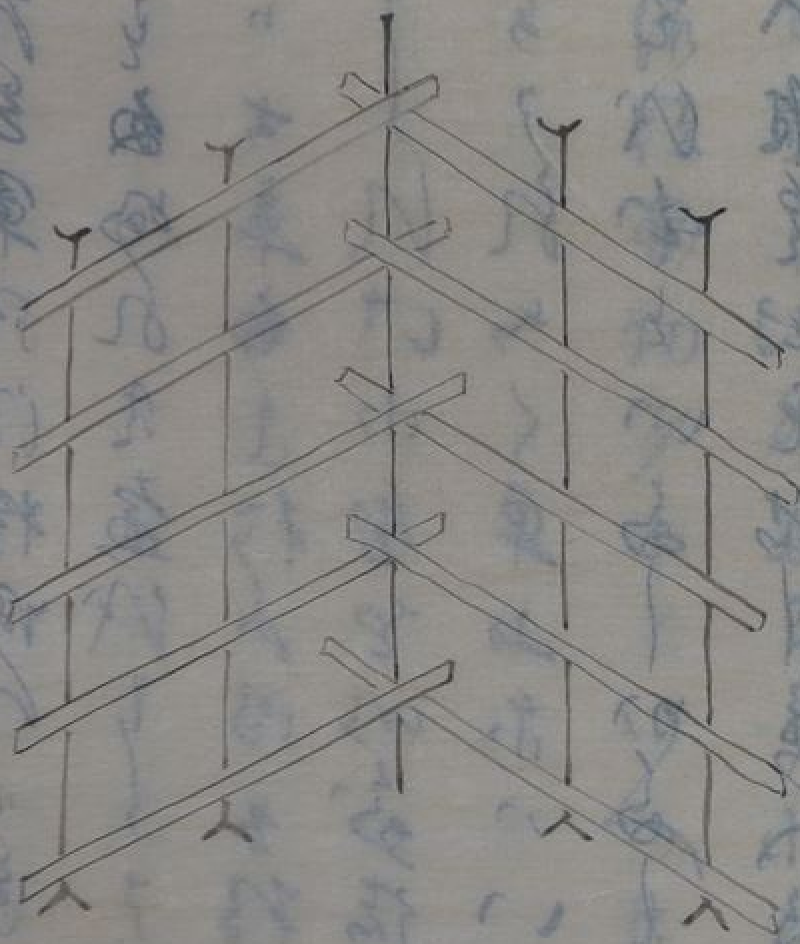
一 かくのこの事
疱瘡又ハ都ヶ瘡出し仕舞先ニ而御座候いゑ
をとれり又ハ大ねの御出座小而御帰る
路而御志の色道具都処

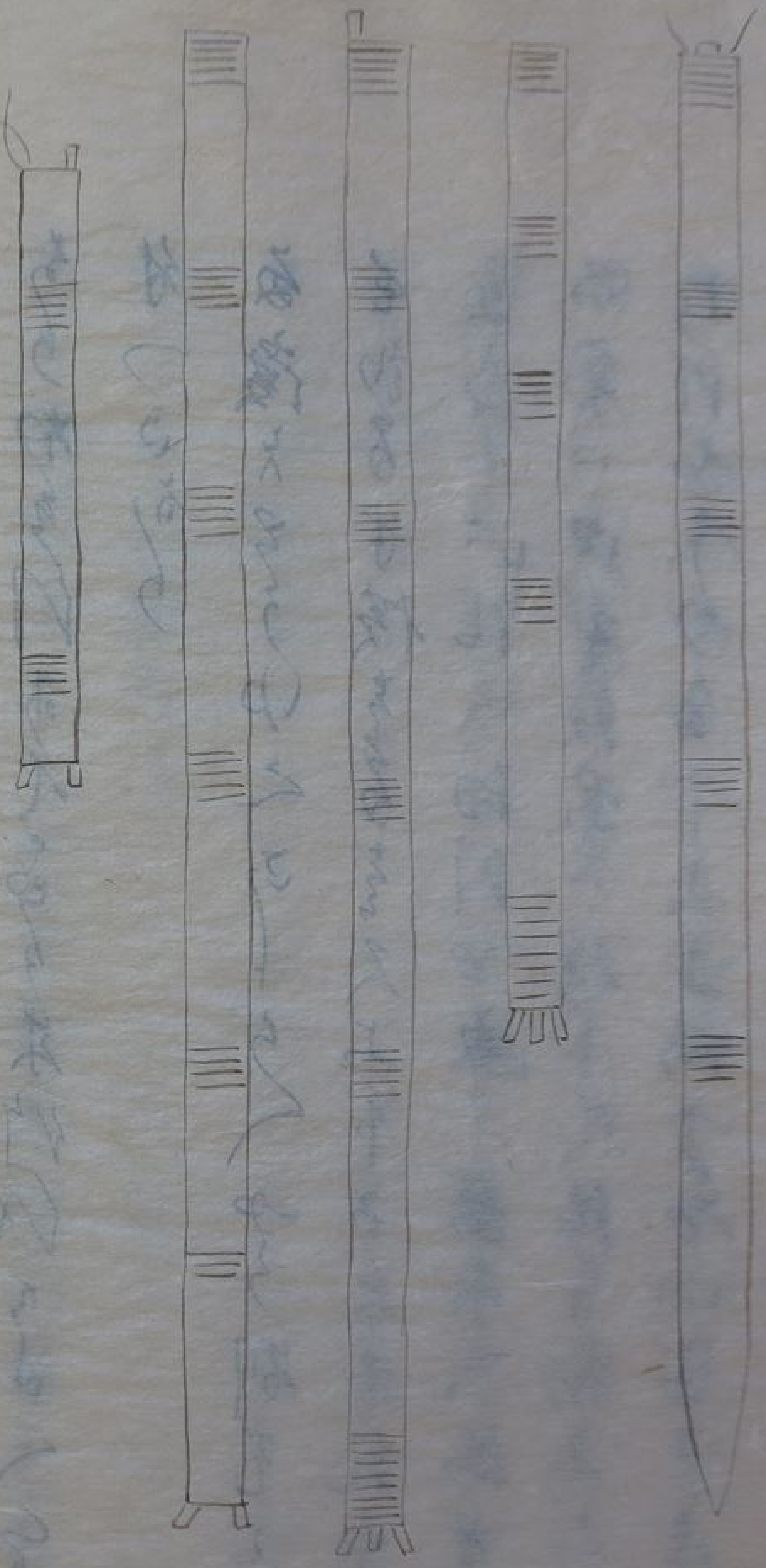
一
切組小屋十畳ら積の事
柱并指物竹共七尺組立つにも小出来
なり
梁指物一畳ならはく重し共弐畳
柱并指物内なのもしに用ゆる
重し
むなき十本畳なたはくなり
柱の切組ハ作るを指面をきりかに竹にて
うちる也くきちにいるし切口小さく

ひの木板をて入きさを付かけ奈てまわ
をうるしをつりとの方のきり也重ね面
又なをいるしれき入入柱小小細釘にて
材料を以積右之うるけと小いいなると
図左なり
ちりとハ一畳をぬき積のちゆうつけい
ぬれて合せを竹柱先又なをを入出なり
法り明立而にの名に縄ぬれちゆうつ
小か

あるはおさへいふなし右方に捕りける称
をうち入ちりくて尾有之又飾ある覚ちあり
つりひにいふなし並之むかひの手図示
はりをもむかひを掲れ矢柱のりるを掲
るくいふしもりくかゝる所を八相三に切
りひ左掛金を上下にかくるに之もり掲
柱を又図示なり
笠木行をゝつ行のおさへ代有きる示
二本長八尺もかり新羊覚ひとりきる紙

有三寸ばかり厚いと少くて二尺おきにすゑる
ありおさへ行本くて見る木行代りるへとまり
付つるなり
扇覆ふ二寸ゆ之まししらく中より別室に生し
長節有半横巻有巻尺上下に所見乳を付
通盈しさし乳へ細付を通し畜本へ結付之
石突ハ四半段宗ハ枚もれ張あるなり上とめ
打付とうり角しと上より坂きをいふしく風
をくむるなり





右の外切組の小屋ハ古人指画所不及
乙勇之為ニ軍陣法将帥の心をも定ニ元扇を
使ハ心を要なる所盡候ものなり然共末
之候ハ古来ある様の時も抱捨要候ハ
定め置し候ハ小屋を以て諸軍を要め
思ひし事ハなく卑山ニハいふし候し
然るハ急候時といふしかるし猶ハ如候
付く不入雑事をも結し置く事ハ為ニ至
取を仍てとし置く志ありて仍あり輕

加様しても結世を用ゆる能かる急し度
量を仍る急しけれとも取るて小屋にハ人小屋
其急ニ候法も切りしといへとも略之

武教全書後序

兵灋者其理出伏羲氏之一畫其用起軒轅氏之制法矣世能知以兵法為戰用之術不知以本源為日新之用其授者以貴詐謀其受者無實學也授受傳習之間可不慎乎崇文者輕武専武者輕文夫文武者不容有所偏廢唯因其人之量而有先後而已於文而示武教武而以文是王者之所師也武教之所全也梅國禎曰古今兵灋盡於七經而七

經盡於孫子者善讀之則皆糟粕也甚可熟味者也

山鹿素行子

武教小學序

夫農夫工夫商爲天下之三寶士無農工商之業而所以爲三民之長者無他能修身正心而治國平天下也然世遠人亡鄉無善俗世乏誠教故或短衣蓬頭而以怒臂按劔爲俗或深衣非服而以記誦詩章爲教其過不及甚可歎息乎有宋晦菴述作小學而人生自八歲迄十四歲教以灑掃應對進退之節愛親敬長親友之倫且以嘉言善行爲終篇其功偉哉盛哉然俗

殊時變倭俗士所用尤泥著則居闔國而慕異
域之俗或學禮義用異風或爲祭禮用異様皆
是不窮理之誤也學者爲拾物致知而非爲效
異國之俗也況爲士之道其俗殆足用異俗乎
習之於幼穉之時欲其習與智化與心成之事
者誠先聖之實也山鹿先生武教之垂戒其教
甚明也於先生之門欲學士之道者必以此教
爲戒其志何放逸乎生知之質上品之士外様
何足習乎然俗殘教弛則自陷溺異端者人心
之危也士食君之禄爲民之長而其形其行其
知不正則天之賊民也尤可汗辱之至也此一
篇輯録而爲梓鋟者殆非先生之志門弟子等
竊蒐集篇題而號武教小學士之浮靡蒙童敬
受此教者爲志士仁人之一助乎玩味而勿忽
矣

明暦丙申八月

門弟子等謹序題

武教小學目録

夙起夜寐
燕居
言語應對
行住坐卧
衣食居
財寶器物
飲食色欲
放鷹狩獵

與受
子孫教戒

武教小學

門人　藤忠之校正
　　　藤可慶句讀

夙起夜寐

凡爲士之法先夙起而盥漱櫛正衣服佩用具盥洗手也漱漱口也櫛梳也用具者腰刀扇火打袋之類也能養平且之氣出孟子而躰認君父之恩情思量今日之家業可
觀身躰髮膚受之父母不敢毀傷孝之始也立

身行道揚名於後世以顯父母孝之終也而后
示家事謁賓客事君則速出仕事父母則行察
其安否矣出而事則謀不出其位侍長者則敬
如父兄能謙退而不爭右事父母序長幼之說也皆明倫之事也以
文會友以友輔仁曾子之言也朱子曰講學以會友則道益明也云云有
益友則問事孔子曰益者三友損者三友友直友諒友多聞益矣友便辟友善柔
友便佞損也能信而不僞常思士之正義而不可懈
是全交之道也以上言明朋友之交也曲禮曰君子不盡人之歡不謁人之忠
以全交也凡仕官之途朝出先人夕退後人歸宅之

後先謁父母下氣怡色內則曰下氣怡色問衣燠寒疾痛苛癢而敬抑
搔之云云著席而問畱守之用所問家事也計急緩而行
其事閑則顧今日之行事暇則披書傳而考士
之正道知義不義之行日既沒則爲夜戒禦火難備
不虞之戒也更不可間斷也入寢所休氣寬躰而令安士卒
之躰凡家司下人者先主而起後主而寐其所休息暫時也故夜寐而令安也
燕居
傳曰仕官之途至四十爲强仕之年內則曰三十而有室
四十而始仕方物出謀發慮道合則服從不可則去註曰四十曰强凡考子孫之

量雖爲弱冠二十而冠始學禮可使經官途矣此章不拘書傳之言唯依其器可有遲速之義也士雖仕君閑暇多其職役之有閑暇也或不幸而未仕君或父母早沒及遠離而不得朝夕之勤仕燕居休暇之日多則其志怠而不慎家業殆類禽獸矣孟子曰人之有道也飽食暖衣逸居而無教則近於禽獸大學曰小人閑居而爲不善無所不至云云故於閑居之士不可無教戒先夙起而盥漱櫛躰認之事如前章出坐謁諸士對賓客於庭前見馬及乘馬御者六藝之一而馬者士之足也不知御馬之法則無達軍戰之用故古人重之師

嘗曰相馬之法好不以道則唯好喜人之目而不知士之用法尤可慎也速食辰上刻爲朝飯之時也盥漱而後或劍術或弓射之禮或鐵炮或鑓皆矯骨節正進退之法也故到師許又招請師而更不可懈久怠則手足不自由骨節不相應而身不輕躰不馴而士之業必闕猶暇則披書而論武義講兵法閱士器士器者士之可用之雜器也師嘗曰兵器之用雖完備收藏而常不試則雖置其職司必怠而久則腐朽或外好内蠹或損多而用不足故武將之古坐席實客之用粧飾之皆以武器而不以玩器是爲尋其用於先覺問其利於師友而或捨或用而盡其實也士之志如斯則其氣專而

不之他放僻邪侈之意無所發故孟子曰人無常産則無常心（産者産業也四民各有恒之産業若失産業則常心放逸而放僻邪侈之心滿溢也）

言語應對

言語應對者志之所適也戲言出於思是也凡士之言語不正則其行必猾也柔弱之言鄙劣之語尤可愼（人必有生産土地之音聲然或好發懦弱之言則行必類此又爲鄙劣凡下之語非上品之士謂不學文之費）戰法軍旅武器馬具之用語各有品賓客葬祭之語宗廟朝廷之言各有則言語輕出應對不當節則威儀不正必招禍之媒也（小學曰無用之辨不急之察弃而不治）不義之論古戰場之事古今勇義之行時代武義之盛衰皆議論而可戒今日之非或嘲他之非或謗時之政或語遊興之樂或言男女之色則心必流蕩而行必陥溺人心甚好之故非禮勿言

行住坐臥

行則不徑（子游曰澹臺滅明行不由徑朱子曰徑者路之小而捷者也動必以正而）

無見小欲速之意楊氏曰後世有不由徑者人必以爲迂不孔氏之徒其孰能知而取之不
礙傍人不爲非禮不出過言自出門如見敵道路
者貴賤往來之徑也有辯讓之禮無喧嘩之事若誤而下人礙他乘馬汚人則速述我誤錯之
事卑言而敬之禮之則他何爭論手怠則必忘禮故自出門如見敵孔子曰出門如見大賓是
表敬恭之切也呉子曰備者自出門如見敵是無不備之謂也出外則可忘內
己上言行法也住則如前法出前章坐則正威儀佩用具
常不忘不虞之戒己上言坐法也臥則不尸論語曰寢不尸朱子
曰尸謂偃臥似死人也傍不離利器嚴夜戒出前章皆先人
而可爲其勞己上言臥法也凡爲士之道行住及坐臥

暫放心則必臨變而失常一生之恪勤於一事
可闕滅變之至也不可知則豈可怠哉禮記曰
出冠義篇凡人之所以爲人者禮義也禮義之始在
於正容躰齊顔色順辭令容躰正顔色齊辭令
順而後禮義備
衣食居
恥惡衣惡食求居安則非志士論語曰士志於道而恥惡衣惡
食者未足與議也又曰君子食無求飽居無求安衣食及居各有分三
者出其位則度量相違而費多財竭而不克成

武備三者不及則志必在吝畜而又不正能守其節是士之用法也凡士之衣服有分唯以稱武備爲用長短縫裁皆有則食者以麁糲爲用唯欲與士卒同滋味而已三畧曰昔良將之用兵有饋簞醪者使投諸河與士卒同流而飲夫一簞之醪不能味一河之水而三軍之士思爲致死者以滋味之及己也然氣質病多脾胃不調和之士又可有養身全生而守死於全道之量言七十者可以食肉是年老而非肉不飽也人生氣之所禀有厚薄雖爲年若其脾胃同七十之人則麁糲之食不足用室宅必以輕薄爲用無費之飾蔽居安室美則志在思家是

非志士之意家宅之廣狹用所尤可守武式傳曰帝堯之王天下之時錦繡文綺不衣宮垣屋宅不堊甍桷椽楹不斲茅茨偏庭不剪鹿裘御寒布衣掩形糲粢之飯藜藿之羹不以役作之故害民耕織之時削心約志從事乎無爲云云

財寶器物

夫財寶者給乏者救貧者省不給招賢者聚士之禮用也器物者爲令足今日之用也爲士之道委身於主君守死於全道是古人之格言也

若吝財寳器物則武義自闕如臨大節殆不
可忘家思家之切弃義遁死受謗於指頭及汚
於父祖人面歎心之事何樂有之乎金銀財器
有餘之輩或失國滅家易身積財之士古今不
可枚舉豈可忽如乎
師嘗曰天下之財寳者天下之財寳而非一
人之財寳能交易利潤而通用萬物故是曰
財寳有財之人皆言厭費不知費金玉盈堂
財器在府而不知施用則天下之財滯一所
而不爲天下之用費蔽何事如之乎人好財
則大際吝嗇之故聖人以金玉不爲財不貴
難得之財况藏土器畫軸銅鐵之器而財之
以千金易之其惑甚乎

飲食色欲

飲食男女者人之大欲存也飲食者爲養身躰
行禮節也色欲者爲嗣子孫止情欲也人皆有
自然之節也士者爲三民之長家業彌重所職任
甚厚豈可不愼乎飲食過量則生病起爭言酒之飲

（節過則失禮起争之基也）不然則睡眠至骨躰重而事事怠生怠多則家業忽而所職之事凝滯其費尤大也色欲淫則内議多而用事有私精氣涌滲則謀事不成甚可畏之至也任重而道遠故以此爲大戒（曾子曰士不可以不弘毅任重而道遠仁以爲己任不亦重乎死而後已不亦遠乎云云）

放鷹狩獵

放鷹狩獵者古之制也鳥獸之荒田園尤可殺生之爲士之道知險阨遠近山川之形計風俗

街歌巷説之品（街歌者於路路街巷之童稺所謡也巷説所風説皆時代之政務畧所發見也）自入水澤山林用矢玉劔戟輕四支習骨節考士卒之材閲兵士之用必士之所可勤也然用有時（知農作之時知寒暑之苦）致有節苟失時忘節則荒田園費民力豈如鳥獸之禍乎士之所爲雖戲遊皆有據而不計其本末則常荒暴而已

與受

凡施受之道君臣上下之義朋友相接之禮士之所可愼守也法曰軍無財士不來軍無賞士

不行香餌之下必有懸魚重賞之下必有死夫
又曰魚食其餌乃牽於緡人食其禄乃服其君
以禄取人皆是古之制也雖有財禄不與施則
無士來之來服唯匹夫獨身也與施超分則財
竭禄乏而武備又何整乎故計出納考度量而
或施或與是為士之法也凡計納而制出考度而知量則無過不及
之謬論詔曰出納之吝謂之有司云云於出納之際不知其當故不及曰吝過曰奢也與
施不於道義則義士不來傳曰使義士不可以
財兩來之食乞食之者不受之豈可不慎乎受

之道有義則不依物之輕重受之可也天下者重器也
堯授之舜舜授之禹而不辭讓爾汝之言至少也人能不受之孟子曰人能充無受爾汝之實
無所往而不為義也朱子曰爾汝人所輕賤之稱闕一義去一道則雖
千鍾之禄天下之重不可受矣凡仕官之士俸
禄之外欲受施與者超分過量之輩欲為數金
乎子曰小民之家無故而得百金非有大福必有大咎何則彼之所獲不過數金其所得
者微而所用者狭無故而得百金則驕其志而喪其所守雖得之必失云云數金者非家用之
財為數之金也不然吝畜積財之俗欲為盈堂乎兩失
當然之理也施與受者士之專可慎也或曰士

與吝畜而積財寧施之有餘

子孫教戒

子孫之恩情者天道之自然血脉相續之所成也人倫之厚何事及之乎我身既没而嗣子放僻則家絶自滅何以恩愛之甚不垂教戒之事哉士者以大丈夫爲勇於愛惠之切以信勇不戒之則非志士仁人孟子曰富貴不能淫貧賤不能移威武不能屈此之謂大丈夫凡幼穉之間氣之所稟唯天然而心知未有所主其習日長月益善悪之所機甚可慎張

横渠曰今世男女從幼便驕惰壞了到長益凶根又曰子愛而不教曰驕子士之教戒子孫使正其知勇其機信其事曲禮曰幼子常視勿誑立必正方不傾聽云云故於知之發考邪正戒邪揚正養勇而不使恐威之雖少事不以詐僞戲遊必以弓矢竹馬之禮言語皆以武義禮讓之節使其精氣全情欲寡教以文學論語曰好仁不好學其蔽也愚好知不好學其蔽也蕩好信不好學其蔽也賊好直不好學其蔽也絞好勇不好學其蔽也亂好剛不好學其蔽也狂云云凡幼穉精氣全備之節先以學令覺先聖之格言是古之法也然或陥記誦或玩

詞章則忘倭俗而欲漢樣婚冠喪祭衣服言語必欲摸漢俗是泥著之所致也明道曰凡百玩好皆奪志至於書札一向好著亦自喪志云云人有氣禀之異故考其輕重清濁令習馴言語已通則選師考友勿令到人品之下康節邵先生戒子孫曰上品之人不教而善中品之人教而後善下品之人教亦不善不教而善非聖而何教而後善非賢而何教亦不善非愚而何師第之相接尤可敬恭兵書武冊不可置污席盥漱而披之貴師如父兄父兄者天然之序也師者導我令到道義知五倫之明其恩情至厚也豈可忽如乎我爲士而輕武書武事者非志士凡女子之教戒

甚以可愼其法多以懦弱爲教大誤也爲士之妻室者士常在朝而不知内故代代夫而戒家業豈以懦弱乎夫男不言内女不言外爲宮室辨内外内則曰禮始謹於夫婦爲宮室辨内外云云男女不同椸枷不敢懸於夫之楎椸能舅姑之道皆内則之言也横者曰椸直者曰楎懸衣者也漢唐之間守義死節之女出列女傳及小學善行篇漢唐已前之風俗不及論也闔國武將之妻室以盛衰不攺節以存亡不易心或當賊或死敵如斯之禮節如此之立操豈以懦弱之教乎蓋女者主陰其

躰柔其心順也是自然之生質也故以柔順為用（柔者柔和也順者順從也不爭不妬不怒不貪是柔順之用也孔子曰婦人伏於人也是故無專制之義云云）能以果斷爲制（果敢決斷也懦弱則泥著而不明）戲遊言語必不可以淫佚之事教以義之正道示以武之本意則夫婦之道正而人倫之大道明矣（王吉上疏曰夫婦人倫大綱也朱子曰有夫婦然後有父子云云師嘗曰迩世之俗教女子之學皆以源氏伊勢物語等之俗書甚可歎息乎此等之書以淫佚之事為樂以悠艶之事爲專或書女子之通別夫或記人情之所及筆力甚柔而尤爲女子之書然以此書爲垂戒之女子今焉有乎所筆削之者亦淫佚之女也必不可令玩味之）

武教全書惣目録

一 自序并序跋
一 主本
　大将三の乗幣之事
一 主本結要の事
　大将八の心乃の事
一 擇将
　侍大将先頭物奉行可申付人品の事
　同不可申付人品の事

家をなくて不叶こ呂の事

大将十色の事

六兵六者の事

五性の事

一 用士

一 人をも語も可化法の事

一 軍陣へ可召連人数の事

一 武者分

我ちかふ不入との事

一 割法

押手鞁を以て人数を先にす法の事

押手鞁打拍の事

一 貝の事

一 陣鐘の事

一 旌旗の事

お約の事

火の事

國多用る法の事

一 撫功
高名誉の批判の事
不覚人の武士批判の事
高名不覚批判分限の事
手負の批判の事
場責高名批判の事

一 内縛
大将右手内縛工夫有為之事

一 軍禮

一 出軍門出儀式の事
頸對面実検見知の事
歸國儀式の事
頸送作法付請取作法の事

一 法令
陣中諸法度の事
制札の事
籠城法令の事
右七一之上巻とゝまる

一 天官
日夜の変
時刻の変
方角の変
雲気乃変 付 雑氣の変

一 初前にて勝負を知る変

道路にて満観気の変

晝夜とも路にて観気乃変

頭勢色を物見知の上にて大将観気の変

一 向敵方角の矢を可射変

矢入をとむるの変

一 地形

地形品の変

一 斥候

攄物見武者変

物見之段の変

大物見乞降乃変

常物見の変 付 夜営の物見の変

一 遠見隠迎使の事

一 物見取之の事

一 小物見一番二番指の事

一 物見武者可見様取之の事

一 物見手出入数見積の事

一 物見武者武功乃事

一 地形見積武功の事

一 敵陣物見武功の事

一 八重かすみといふ物見の事

一 物見武者之心得の事

一 侍用武功

一 小身の士之身ニて武士可存之心得乃事

一 小身の士武功の事

一 同武具之心得乃事

一 同陣中へ召連ハ召具の事

一 同馬付一番具ハ宰馬の事

一 同宰領取立之事 付 宰領の事

一 かくし討の事 付 放討の事

一 用間
反間の変
計策の変
城責計策の変
むかしより敵を集めかくし置所の変
味方用捨の変
忍兵を忍ぶといふ変　同　武功の変
計策乃兵志のいふ不意入る所の変
計策文使者乃変

一 右之一々之下書となく
一 練陣
備を定むる所の変
備をまから取り組所の変
座備定法の変
一 行坐備人数積りの変　同　作法の変
九服大座備の変
八陣座変の変
一 備武功の変

一 行軍
諸家中備押の事　同　旗本備押の事
備押殿之の事　同　武功乃事
備押ニ就て可申付心得の事
一 営法
不可陣取地形の事　付　陣取武功の事
可陣取地形見定事　付　陣取仕作法の事
陣屋かけ様乃事　付　諸役者ニ書付　同　作法の事
於陣作法の事
一 山陣城乃事
陣中ニて喧嘩之捌の事
陣を取之式事
右之并二の丸之事
一 城築
城地を定る事　付　平地ニ尺立武功の事
山城ニ丸之地形を定る事　付　山地尺立之武功事
城之縄張事　付　城之縄張武功事
小口取之式事

一 郭の事

さゝみかさしの事

出丸の事 付 石垣武功之事

一 扉うけやうの事

堀内居他武功の事

拵形矢倉一ツ付色々の事 付 矢倉拵様而之事

矢さ間鉄炮さ間切組の事 同武功乃事

横矢の事

堀乃事

櫓手両之武功の事

柵木付塵防の事 同不浄かくしあらし之事

一 堀外拵之の事 付 堤門際武功の事

一 山城縄張の事

境目城縄法付 付城両城二三丸城捉法の事

城取并浮城可為拵の事 付 尾要城乃事

堀築縄法武功相伝の事

右の外第三の巻にあるへし

一 合戦

一
敵出ヘ可働入味方ニ而并時の事
出陣の味方ニ而一ト中合之事
味方討ニ而中合仕乃事
出陣ニて頭不継事
敵出ヘ働入仕候之事
夜戦仕候の事
主戦
初度の三者の事
内時使定の事　付人質の事

一
敵働出へかゝりむかひ味方仕候の事
逆寄ニ被出候ニ付構不の事
了戦仕候の事
攻城
敵城を可責味方之二重手配之事
敵城へ押よする作法の事
敵城を乗込作法の事　付仕寄武功并埋草乃事
城を責る仕候の事　付　俄責の事
城責武功の事　付山城責候武功の事

城責ハ計策の事
城不責落して引かるゝ作法の事
城責落して後仕置の事

一 守城

籠城の大将仕定の事 付 逆寄仕様の事
城中兵粮用意の事 付 諸道具用意の事
籠城備定の事 付 人数配りの事 同 城中萬仕様の事
籠城の大将ハ有武功の事 付 諸法度の事
籠城の時兵粮等落して武功事 同 兵粮捨時之作法事

城持不勢ニ入の事

一 寡戦

一二郡を領する侍大将にて矢合様の事
小勢備定事 付 寡戦仕様の事

一 衆戦

大軍の大将にて矢取様の事
流を治め囲ミ作法の事
大軍備定事 付 大軍を以て小勢を引請武功事

一 歩戦

一 敵ハ馬上多く味方ハ歩兵多き時謀功事
足軽頭指事 同足軽使之事
同敵を防ぐ所の事 付 足軽武功の事
足軽の役義の事 付 弓打鉄炮の足軽の事

一 騎戦
馬を入る謀功の事 付 云家の事

一 山戦
山手より一段高き所を徒の事
山中伏押の事 付 初て見る山中ニ而兵をかける事

一 我山上ニ有て敵を山下ニ受入る時謀功の事
我山下ニ有て敵を山上ニうけたる時謀功の事
一 撲遅也の字儀ニ山小屋へ取籠る謀功の事
右を見聞の上ニ書とゞまる

一 河戦
可渡行河者の事 付 川こし所の事
敵川を前ニ当て防く時川を渡り行謀功の事
河を渡る敵を川を前ニ当く防戦謀功事
兵責乃事

一 舟戦
軍船作り様の事 付 軍船并ニ入る具の事
軍船備配りの事
我船をもって敵出の海邊へ可付船謀功の事
敵船をもって味方の海邊へ寄るを防ぐ謀功の事
我船をもって敵出の海上を押渡る作法の事
敵船をもって敵出の海上を押通るを我船をもって防ぐ作法事
船筏へ入る船営をなす事 付 船軍武功の事

一 伏戦
覆伏の事 同 武功の事
地下かまりの事
覆伏の手立をもって掛る相手の事
敵の様子を兼て覆伏の有無を知る事
覆伏の有を難計と謀功の事
覆伏をなせし出損の事

一 火戦
放火を用る徒の事 同 可焼を防ぐ徒の事
焼働武功の事 同 自焼作法の事

烽火の事
の拵し篝并番の火の事

一 夜戦

夜討要害ニて相渡るへき事 付 要害の相図の事
要害ニて出前可申哉事 付 同出立の事
要害ニて出る方武器の事
要害武功乃事 付 詞の事

一 夜守

敵方より陣営へ夜戦仕かくる節心積の事

要害といふ陣名の事
要害仕かけらるゝ作法の事
敵方要害付要害の乗代諸功の事

一 雑戦

谷戦の事 付 林戦の事
足入沼田ニて敵出逢候節の事
逆風逆水ニ敵ニ逢候の諸功の事
敵ゟへ働入引取りの作法の事
小迫合ニ深働致し引揚武功の事

一 引取敵へ可付武功の事
戦法
三戦五戦の事 付 二の備色々武功の事
戦法色々の事
奇正の事
虚実の事
心気力の事
本備付離備の事
右之ヶ條の書とよとる

一 兵具
兵具品々の事
新兵品々の事
右之ヶ五の書とよとる